初年次教育におけるアクティブラーニングの有効性

―「表現活動」の実践を通して ―

Effectiveness of Active Learning in the First-Year Experience

― Practices of Expressive Activities for Freshman Students ―

次世代教育学部こども発達学科
大橋　節子
OHASHI, Setsuko
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

事務局　教務課
寺岡　　陸
TERAOKA, Riku
Office of Academic Affairs
Executive office

次世代教育研究所
ナリス　マノロスカル
MANOROTHKUL, Naris
Research Institute of Education for Future Generations

次世代教育研究所
増岡　希望
MASUOKA, Nozomi
Research Institute of Education for Future Generations

次世代教育研究所
山口　朱郁
YAMAGUCHI, Shuka
Research Institute of Education for Future Generations

次世代教育研究所
キャロライン　ディル
DALE, Caroline
Research Institute of Education for Future Generations

体育学部体育学科
小澤　尚子
OZAWA, Shoko
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

次世代教育学部国際教育学科
小川　正人
OGAWA, Masato
Department of International Education
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：初年次教育，アクティブラーニング，表現教育，表現活動，心理尺度測定，レジリエンス

Abstract：This study primary focuses on how various practices in a course of expressive activities effect first-year students' experiences. The course introduced a variety of active learning methods such as singing, dancing, performing, group-work, reflection papers, etc. Using the Resilience scale, the study examines how students taking the course improve their interpersonal resilience, but there is no significant difference of personal resilience between the students taking the class and the students not taking the class. To investigate the relationships to personal resilience in first-year experiences classes with active learning methods, further studies will be consistently needed.

Ⅰ．はじめに

「大学全入時代」と言われる大学のユニバーサル化と18歳以下人口の減少が同時に進行する中で，大学教育に関する諸問題が，教育関係者だけでなくマスメディアなど社会においても大きな関心を集めている。大学生の学力や学習意欲の低下，自修時間の少なさ，大学生活への不適応，友人や教員など人間関係構築の難しさ，クラブ・サークル・イベントへの参加率や関心の低下，大学とアルバイトの往復だけの生活など，

様々な問題が顕在化している。

それらの様々な問題のひとつに，大学生の「コミュニケーション能力」が挙げられる。「教員がグループ討論を促しても，誰も発言しようとしない」「教職員が話しをしている最中に突然泣き出す」「大事な事を教職員に直接話さず，メールやラインで連絡する」など枚挙に暇がない。学生のコミュニケーション能力の乏しさを感じながら，どのように対応していいのか悩んでいる教職員も多いのではないであろうか。

コミュニケーション能力は人間関係を形成し，社会と自己をつなぐ上での土台となる能力であり，総合力としての人間力においても重視される能力である（榎本，2006，人間力戦略研究会，2003）。そのためか，企業が新卒採用の学生に期待する能力のなかで，コミュニケーション能力は常に上位に位置付けられている。採用試験では，グループディスカッションや課題プレゼンテーション，作文・論文試験，さらにはセミナー会場や説明会での聞く態度，グループワークでの参加姿勢のチェックなど，コミュニケーション能力を評価する試みがされている。

榎本（2006）によれば，コミュニケーション能力は社交性，感情表現力，自己主張力，他者理解力，傾聴力，自己開示力などが構成要素としている。小見山（2006）は意志疎通，協調性，自己表現などを提示し，平松（2006）はコミュニケーションを成立させる条件として，「自分から働きかけをすること」，「自分が相手に受容されること」，「話しの内容が相手に理解されること」，「話しの内容が相手の利益にかなうこと」の４つを挙げている。これらのことを踏まえると，コミュニケーション能力とは，自分からの働きかけである発信力と，相手の「受容」や相手を「理解」するための傾聴力が中心になると考えられるだろう（日潟など，2009）。

Ⅱ.「表現活動による人間力養成」の授業

中国地方にあるA大学は，初年次の大学生のコミュニケーション能力の向上を図るため，2016年度に「表現活動による人間力養成」を開講した。講義などの座学ではなく，アクティブラーニングの技法である歌やダンス，パフォーマンスやグループワークを通して，自己を発見し，他者に開示し，自己を表現する力を育成していくことを目的とした。

「表現活動による人間力養成」の授業を実際に担当したのは，４名のヤングアメリカンズ出身のメンバーである（うち２名はアメリカ出身）。ヤングアメリカンズはアメリカ・カリフォルニア州に拠点をおく非営利団体であり，日本を含む世界中様々な地域にて多くの子どもたちに向けミュージックアウトリーチと呼ばれる教育活動を行っている。４名のメンバーはヤングアメリカンズの経験を活かしながらも，大学の建学の精神や教育方針を基に，新たに「クレッシェンドプロジェクト」を立ち上げた。クレッシェンドという名前には，今後このプロジェクトが強く大きく独自の形で成長していくようにとの期待と，学生たちが授業を通して人間力を伸ばしていってもらいたいとの思いが込められている。

授業は分単位で内容が構成され，毎回クラス全体での準備運動から始まり，最後には振り返り，質問，考察の時間を取っている。2016年度の授業履修者数は120名であり，内78名が日本人学生，42名が留学生である。履修者が予想より多数であったことから，120名を２つのグループ，60名ずつに分け隔週で授業を行った。

2016年度の前期授業では，学期末にショーを創作し，発表することに重点を置き，実際に披露する歌やダンスの振り付け，ショー全体の流れを伝授し，様々な形で自己をしっかりと表現できるよう促した。前期の最終目的は，各授業で習ったすべてのショーの演目（下記参照），流れを把握し，グループ同士互いに発表し賞賛しあうことであった。授業最終日には２グループが交代で，ブロードウェイミュージカルソングやポップソングをアレンジして使用した，合唱，全体ダンス，各パートを与えられた歌やダンスのソロ等を組み込んだ30分のショーを披露しあった。

前期の授業ではインプロヴィゼーションと呼ばれる即興演劇をゲームにして用い，自己表現力の養成に力をいれた。全てのゲームにはクラスの中だけでなく日常生活に活かせるような目的や意図が込められている。例えば，スクリーミングゲーム（５－９人で円を作り全員下を向く。円の中でアイコンタクトを取る人を事前に決め，３・２・１の合図で一斉に顔を上げアイコンタクトを取る。もし誰かと目が合ってしまったら叫び負けとなる，という主旨のゲーム）には，身体言語や声の使い方の応用などの要素が含まれる。見知らぬ者とも自然な繋がりを持つきっかけとなるために，クラスの外でも活かせるよう多目的要素を含んだゲームをこの授業では扱っている。即興演技の傍ら，クレッシェンドメンバーたちは前期のまとめのショーの創作も進めていった。ショーはオープニングダン

ス・２つの合唱・３つのグループダンスの演目で構成されている。それぞれのグループは，最後の合唱を除き同じショーの演目を与えられた。前期の大部分のクラスでは，学生により自信を持ってもらい演目やパフォーマンスに慣れてもらうため，前週までに習った演目の復習をし，今週分の新しい演目を習っていくというスタイルをとっていた。

前期最終日の授業では，毎週提出課題であった学生自身の変化や自己分析を記録した日記，また２ページから３ページに及ぶレポート課題「高校時代の自分について，大学に入学してどのような変化があったか表現活動による人間力養成の授業を受講しての現在の自分自身について」を提出させた。前期の成績は，最終レポート課題と授業の最終日に実施したグループ別発表会への参加態度や取り組み姿勢を併せて評価した。

後期の授業では，自身の表現よりも，前期に得た表現技法をいかに活用するかに重点をおいている。学生には，自身の表現力の養成にとどまらず，学生同士が互いに表現力を高め合い成長することを期待している。後期の授業には大きく２つの指導項目がある（１，即興演劇　２，“教える”とは)。学生は実践で活かすため前期で学んだ表現をより批評的に考えることを要求されている。授業外の課題としては後期中最低４回の個人課題ノートの提出（上限はなし)，授業で扱う問答型のワークブックを完成させ，後期の期末レポートでは前期から後期にかけての自身の成長を自己分析し，クレッシェンドプロジェクトチームとの一対一の面談をすることが要求される。

後期の前半では，即興演劇の持つ力に着目し，日常生活のあらゆる場面にて，いかにその力を反映することができるかを学んだ。初回の授業で受講学生に，表現技法を学んだ前期授業とは違う形であることを伝えた。前期に全体を２グループに分けていたが，後期に新しい２グループを再構成したのは，過去に活動する機会のなかった他学生との関わりを持つためである。

新しいグループでの初回の授業では，過去に学んだ即興演劇のゲームをはじめ，応用版や新しいものにも挑戦した。ゲームを一つずつこなす上で，各ゲームが持つ目的や意味を説明し，日常生活で直面する問題や状況を即興演劇のゲームにより解決する方法を示唆した。その週の授業では，実際に大学で見られるいくつかの問題状況を提示し，既存または学生による新規創作の即興演劇のゲームを用いて，どのように状況解決へと導くことができるか，学生に案を出してもらった。学生を各５，６名，計10名の小グループに分け，それぞれ与えられた問題状況の解決策を提示させた。話し合いとブレインストーミングの後，２つのグループごとに互いにどのようなゲームを用い，問題状況の解決へと導いたかという背景を説明しあった。後期後半にて，効果的に教えるための準備材料として，即興演劇を用い，また深く内容を説明し伝授した。

授業では，ワークブックにおける“教える”とは，の指導項目が進行している。“教える”とはでは，まずクレッシェンドプロジェクトチームメンバーが学生へダンス指導を行い，演目をいくつかのパートに分け，各々の教員による異なった指導法に着目することから始まった。指導後学生は，提示された指導法を批評的な視点で捉え，自身に見合う指導法を見つけた。

学生は10分間を使い，自身の力を効果的，明確に示すことのできるレッスンプランを作成し，他学生へ発表することを要求される。発表をするグループは，即興演劇で状況解決をした際と同様のグループを用い，発表の後学生間の相互評価を行う。

通年での最終的な目標は，学生自身がリーダーとして成長し，さらに学生リーダーから指導者としての移行を促すことにある。彼らが授業での経験を実生活に活かし，他者との効果的なコミュニケーションを図るために必要な材料を与えることで，自由な自己表現のできる人材を養成していくことである。

Ⅲ．研究の目的

本研究では初年次教育における表現活動の実践を通したアクティブラーニングの事例に着目する。具体的には，学生が表現活動によるアクティブラーニングをどのように理解しているかという視点で捉えていく。

表現活動について川崎（1987）は，演劇や歌唱，舞踊，オペラなど，演じることによってなされる“舞台芸術”をパフォーミング・アーツ（Performing Arts)，また建築や彫刻，絵画，音楽，詩といった芸術的価値を専らにする活動，その“美術作品”をファイン・アーツ（Fine Arts）に分類している。パフォーミング・アーツはファイン・アーツに比べ，人前で何かを演じる，すなわち人に見られるという意識が非日常空間を生みだすことから，表現活動に対する「難しさ」につながる要素をもっているとしている。表現活動は，人間生活そのものでありながら，対人を意識した表現力を問われる機会も少なくない。さらに川崎（1987）は，これらは人間性そのものを重視する人間教育の基礎として位置付けされなければならない

と述べており，表現活動によって人間性を豊かにする可能性について示唆している。

また金子ら（2014）は，芝居や歌，ダンス，殺陣等の表現活動を中心に行うパフォーマンス活動が高校生の学校生活への適応に及ぼす影響について，感情表現によって自分自身の変化として自信を感じるようになり，学校生活への適応の人間関係の広がり・構築，学校行事への積極性へとつながるケースも見られたと述べている。

幼稚園教育要領，保育所保育指針の領域「表現」における目的をみていくと，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」と記述している。毎日の生活の中で，身近な周囲の環境とかかわりながら自分の心の動きを声や体の動き，素材となるものなどを仲立ちにして表現し，その過程を通して，感じること，考えること，イメージを広げることを重ね，感性と表現する力を養い，創造性を豊かにしていくことが目指されている。

古市（2007）は，身体表現について，定型的な枠ではとらえにくい分野であり，いくつかの困難さをもつ領域であると指摘している。それは，一回性というデータ収集の困難さや，学校という集団生活の影響が同時進行で起きており，表現活動における授業後の評価に基準が曖昧であることを主な理由とし，研究の蓄積も十分ではないとしている。

本研究では，表現活動に関する曖昧な基準を可能な限り客観化するために，尺度を用いた量的データによる研究を試みることとする。本研究では特に教育現場における「レジリエンス」教育に注目した。レジリエンス教育に関しては，Rutter, et al（1979），およびWerner & Smith,（1988）の研究により，学校と教師が子どもの逆境に対する回復力を育てる上で重要な役割を果たす点が明らかとなり，次のようなレジリエンス促進に向けての学校や教師のあり方が示された。

1．個々の子どもに注意を払う
2．一貫性のある学びの環境（教師や生徒が目的を持って行動し，サクセス志向が明確な環境）を保つ
3．スポーツ，音楽やアート，学業など色々な点で活発に活動する
4．教師が生徒に関心を払い，積極的な役割のモデルやメンターとなる

このような特徴を持った学校では，問題解決の技能，自立，目的志向，積極性が育まれ，将来への肯定的な考えを育て，コミュニケーションや交流の技能が向上し，これら資質の形成を通してレジリエンスが育まれると考えられる。さらに，Benard（1991，1995）は，学業が劣る生徒について成績が回復するか調べた結果，次の４つの要因が関連することがわかった。それは，下記の通りである。

1．重要な成人との交わり
2．時間の有効利用
3．仲間からの励ましなどを通しての自己の良いところを認識する
4．自己実現達成への期待を持って何事にも挑戦する

さらに，これらに伴って向上するのが，充実感，目標，責任感，楽観的なものの見方，自己への期待，それに対応能力である。これらの力が向上することによりレジリエンスが増すと考えられる。大橋（2016）の研究では，全日型通信制高等学校においてレジリエンスの効果があることが報告されていることから，本研究は大学生に表現教育を行うことでレジリエンスが向上するのではないかと仮説を立てた。そこで，精神的回復尺度（レジリエンス尺度）（小塩ら，2002）を使用し検討することとする。

Ⅳ．研究方法

（1）対象者

調査対象者は，中国地方にあるA大学に在学する１年生631名とした。対象者のうち，表現教育の授業を受講している学生と受講していない学生の２群に分け調査を行った。

「表現活動による人間力の養成」の授業を受講している学生は，現代経営学科25名，教育経営学科33名，健康科学科４名，体育学科10名の72名（有効回答率：94.7%）であり，授業を受講していない学生は，それぞれ現代経営学科24名，教育経営学科67名，健康科学科64名，体育学科190名，こども発達学科58名の403名（有効回答率：72.6%）であった。

本調査は，授業を受講している学生を「経験あり」，授業を受講していない学生を「経験なし」とした。

（2）調査時期

調査は，2016年７月に行った。

（3）倫理的配慮

質問紙調査を行うにあたって，研究の目的や調査内容を学生に伝え，回答は任意であることを説明し，理解を得た上で行った。回収した回答は，鍵のかかる場

所にて厳重に保管を行った。

（4）調査内容

表現教育が大学生に与える影響を測るために量的研究を行った。使用尺度は，精神的回復力尺度（レジリエンス尺度）を用いて調査を行った。

精神的回復力尺度は，下記の３因子より構成されている。①【新奇性追求】：物事に興味や関心を持ち様々なことにチャレンジする姿勢，②【感情調整】：自分の感情のコントロール，③【肯定的な未来志向】：明るくポジティブな未来を予想し，その将来に向けて努力しようとする。

（5）分析方法

精神的回復力尺度（レジリエンス尺度）の因子分析を行った。すべての尺度は，その後，SPSS（ver.20）を用いて分析を行った。精神的回復力尺度（レジリエンス尺度）は，小塩ら（2002）に倣い３因子で分析を行った。【レジリエンス】と３つの下位尺度【新奇性追求】，【感情調整】，【肯定的な未来志向】の一元配置分散分析を用いて分析を行った。

Ⅴ．結果

因子分析を行った結果，先行研究と同様な結果を示した。したがって，すべての項目・下位尺度に対して一元配置分散分析を行った。

【レジリエンス】：教育経営学科の表現教育あり（4.20±0.57）は，表現教育なし（3.72±0.53）より優位に高かった。（Fig. 1）

【新奇性追求】：教育経営学科の表現教育あり（4.41±1.03）は，表現教育なし（3.81±1.05）より優位に高かった。（Fig. 2）

【感情調整】：教育経営学科の表現教育あり（3.78±1.26）は，表現教育なし（3.36±1.22）より優位に高かった。（Fig. 3）

【肯定的な未来志向】：学科間に統計的な有意差は，見られなかった。（Fig. 4）

Ⅵ．考察

大橋（2016）は，表現活動を行うことで全日型通信

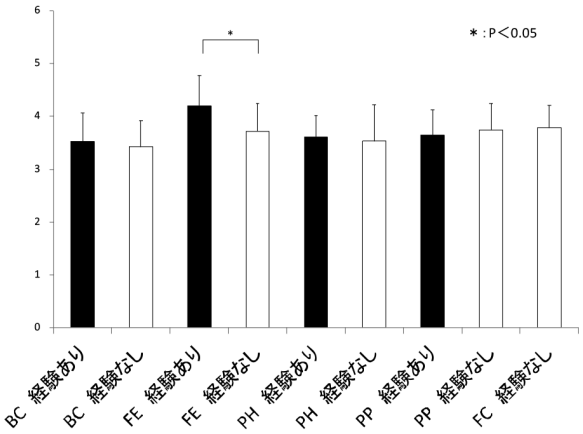

Fig.1　レジリエンス

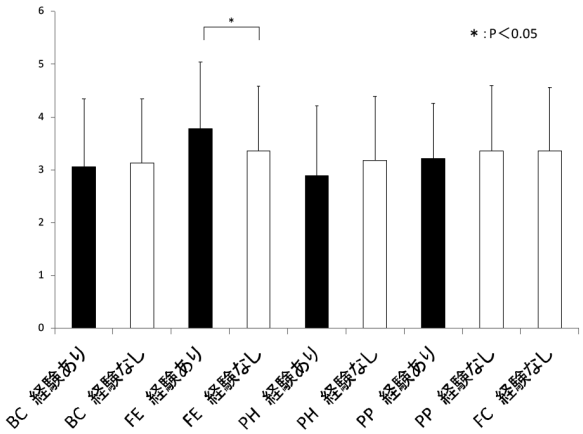

Fig.3　感情調整

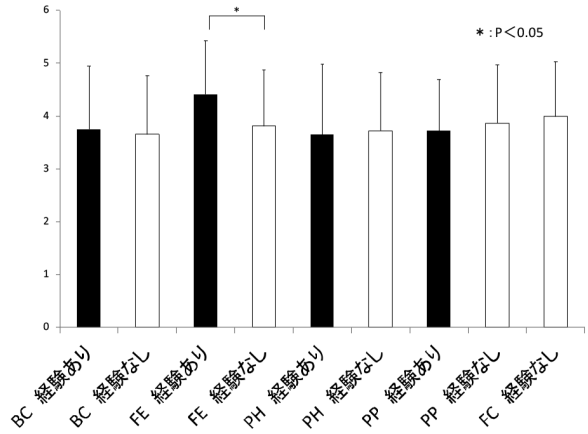

Fig.2　新奇性追求

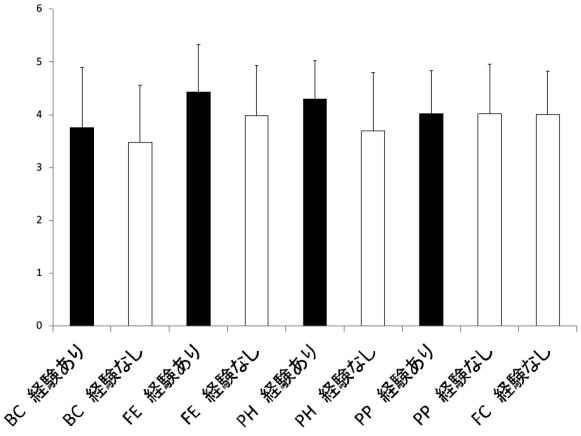

Fig.4　肯定的な未来志向

制高等学校においてレジリエンスが高まると報告している。調査対象は，表現活動をすることで過去に不登校を経験している生徒・不登校を経験していない生徒のどちらも精神的回復力尺度が高まることが示されている。

本研究は，大学において初年次の学生を対象として，表現活動を行うことでレジリエンスが高まると仮説を立て精神的回復力尺度を測定した。

学科間の比較において，表現教育の授業を受講した教育経営学科の学生は，授業を受講していないかった教育経営学科の学生より【レジリエンス】，【新奇性追求】，【感情調整】が有意に高かったことより，教育経営学科においては，レジリエンスが高まった可能性が示唆された。

調査大学で教育経営学科に所属する学生は，小学校教諭を目指す学生が多い。そこで，表現活動による経験がレジリエンスを高め有効に働く事が示唆される。

本研究の課題として，授業履修者を対象としているため，比較人数にとてもばらつきがでた。今後は，比較が正確に行えるように調査対象者の選択，対象群の設定を検討する必要がある。そして，「授業前と授業後での各尺度の変化」，「長期的な表現活動がもたらす精神的・身体的変化」，「競技スポーツとレジリエンスとの関係」，「卒業後の長期的な追跡調査」等を検討する必要がある。そして，量的調査に加えて，質的調査も検討する。

Ⅶ. おわりに

本年度から初年次の学生を対象に開講した「表現活動による人間力養成」では，知識の一方的な伝達を主眼とする講義形式の授業と違い，授業中に学生が歌やダンス，パフォーマンスだけでなく，問題を解決するためのグループワークや，お互いに教え合うといったアクティブラーニングの技法がふんだんに設定されている。

アクティブラーニングについては活発に議論され，関連する書籍も多数出版されているが，その概念や手法は厳密には定義されていない。ボンウェルら（1991）は，「教育者の『アクティブラーニング』という用語の利用は，共通の定義というよりも，直感的理解にもとづいたものである」と述べ，アクティブラーニングに共通している要因を整理しながら，アクティブラーニングを「読解・作文・討論・問題解決などの活動において分析・統合・評価のような高次思考課題を行う課題」と位置付けている。

アクティブラーニングにおいては様々な教育方法が用いられているが，授業形態の観点からすると，知識の一方的な伝達を主眼とする講義形式の授業と違い，授業中に学生が何らかの能動的な学習活動を行うように設定されたものと言えるであろう。Zayapragassarzan & Kumar（2012）はアクティブラーニングで用いられている12の主な技法を提示している。

1．コンセプトマップ
2．協同的執筆
3．ブレインストーミング
4．協調学習
5．ミニットペーパー・自由記述
6．シナリオ・事例学習
7．問題解決型学習
8．チーム学習
9．事例設定型教授
10．パネルディスカッション
11．ピア・インストラクション
12．ロールプレイ・演劇・シミュレーション

上記の12の技法は，アクティブラーニングという言葉が広く使われるようになる以前から，大学教育の中で取り組まれてきたものである。「表現活動による人間力養成」も，12番目のアクティブラーニングの技法「ロールプレイ・演劇・シミュレーション」に近いものである。

アクティブラーニングが注目されているのは，大学が「何を教えた」ではなく，学生が「何を身につけたか」が問われる時代になっているためであるといえよう。学生たちを取り巻く社会がグローバル化など，より複雑に，かつ変化の速度が急激に速くなっているため，そのような社会に対応，世界をリードしていく人材の育成が大学に求められている。アクティブラーニングは今後の大学教育を展望する上で避けて通ることができない重要な教育方法として認識され，実践的にも広がっていくであろう。同時に学士課程教育の一環として初年次教育を組織的に展開するなかで，アクティブラーニングを活用するなど学生の学力の多様化に対応しながら，高等教育の質をいかに保証するのかということが重要な課題になっている。

参考：「表現活動による人間力の養成」で使用した演目
（編曲・振り付けはクレッシェンドプロジェクトメン

バーが担当）

・Shut up and dance（オープナーダンス）

・Happy medley（合唱メドレー）

Oh Happy Day

Don't worry… be happy

Happy（Pharrell）

・Disney medley（ダンス 歌混合メドレー）

Zero to Hero

Be like you

Trashing the camp

Dig a little deeper

Can you feel the love tonight

・Pop medley（ダンスメドレー）

EDM

Problem, Focus

What do you mean

Best song ever

Domino

Lose control

Shake it off

・Broadway medley（合唱メドレー）

Seasons of love

Hard knock life

Climb every mountains

Do you hear the people sing?

Defying gravity

・Beatles medley（合唱メドレー）

Here comes the sun

Black bird

All you need is love

Hey Jude

Let it be

・You can't stop the beat（クローザーダンス）

引用・参考文献

榎本博明（2006）．コミュニケーション力尺度の信頼性と妥当性，日本パーソナリティ心理学会第15回大会発表論文集，110-111.

大橋節子（2015）．不登校経験のある生徒の学校適応に関する研究－通信制高等学校におけるパフォーマンス活動，甲南女子大学

川崎以付史（1987）．クリエイティブ・ムーブメントにおける教育と舞台芸術学（パフォーミング・アーツ）との関連について，日本保育学会大会研究論文集　第40号，30-731.

厚生労働省（2008）．保育所保育指針解説書，pp. 96-97，フレーベル館

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）．ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成－，カウンセリング研究，35，57-65.

小見山隆行（2007）．大学から職業への移行問題とキャリア教育の考察，愛知学院大学論叢商学研究，47，179-205.

田辺昌吾・江原千恵・内藤真希・古市久子・遠藤晶・松山由美子（2012）．身体表現の指導の現状に関する研究－保育者が指導する上で重要視している内容について－，四天王寺大学紀要第54号

人間力戦略研究会（2003）．人間力戦略研究会報告書若者に夢と目標を抱かせ，意欲を高める－信頼と連携の社会システム－，内閣府人間戦略研究会報告書.

日潟淳子・森口竜平・小山田祐太・齋藤誠一・城仁士（2009）．正課外活動によって得られる能力尺度の開発　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，２（２），129-134.

平松琢弥（2006）．豊かなコミュニケーションの創造に向けて，熊本大学文学部論叢（コミュニケーション情報学科篇），91，63-76.

古市久子（2007）．身体表現の発達に関する研究の現状と課題，児童心理学の進歩，46，171-195，金子書房

松村朋子（2016）．学生の身体表現への意識変化に関する研究保育内容指導法の授業を通じて，白鷗大学教育学部論集pp. 303-321

文部科学省（2008）．幼稚園教育要領解説，158-159，フレーベル館

文部科学省（2008）．学士課程教育の構築に向けて，文部科学省

Rutter, M., B. Maughan, P. Mortimore, J. Ouston, and A. Smith. Fifteen Thousand Hours. Cambridge, MA: Harvard University Press. (1979).

Werner, E., and R. Smith. Vulnerable but Invincible: a Longitudinal Study of Resilient children and Youth. New York: Adams, Bannister, and Cox. (1989).